

ウラジオストクにおける日露経済協力



日本企業関係者と（筆者は左から3番目）

日高 俊文 (ひだか としふみ)

前・在ウラジオストク日本国総領事館 副領事
国土交通省北海道開発局札幌開発建設部
都市圏道路計画課道路計画専門官

2001年(株)奥村組入社、地下鉄の耐震設計等に従事。2004年北海道開発局入局、主に道路部門で勤務。2017年3月から2020年3月まで在ウラジオストク日本国総領事館に勤務し、日露経済協力等を担当。2020年4月より現職。

1 はじめに

私は2017年3月から2020年3月までの3年間、ロシアの極東連邦管区的首都ウラジオストクにある在ウラジオストク日本国総領事館に勤務し、日露経済協力などの業務（都市環境整備、観光、運輸）を担当しました。

着任から遡ること1年、日露協力による「都市づくり」が、まさにウラジオストクを舞台に始まろうとしていました。2016年5月、安倍総理はプーチン大統領に対し、日露経済交流の促進に向け、8項目の「協力プラン」^(注1)を提案し、同年9月、ウラジオストクで開催された東方経済フォーラムにおいて、「協力プラン」の枠内でウラジオストクを都市環境整備のモデル都市とすることを提案しました。それ以降、安倍総理は日露協力の進捗を確認するために毎年必ずウラジオストクを訪れるようになりました。時を同じくウラジオストクに着任することになった私は、日露協力による「都市づくり」のために、奔走することになりましたが、国内では決して味わうことができない貴重な国際協力を経験することになります。

安倍総理による8つの項目の「協力プラン」の提案以降、ロシアビジネスに関心を寄せる日本企業が増え、ウラジオストクを訪れる日本企業関係者が急増しました。初めてロシアを訪問するビジネスマンの多くと意見交換をしましたが、ソ連時代の「暗い」イメージを想像していたものの、実際に来て見て「ヨーロッパの



ウラジオストク位置図



ウラジオストクで開催された都市環境整備の日露次官級会合、筆者は右列（日本側）一番奥。

街並みがきれい」、「料理が美味しい」、「ロシア人は親切」など印象は明るくてポジティブなものが多く、180度イメージが変わった等の感想をよく聞きました。これを読んでいる方々もロシアを訪れた経験がない人がほとんどだと思います。ロシアは「近くて遠い国」とよく形容されますが、ロシアがどんな国か想像できる方は少ないのではないのでしょうか。

そこで、本稿では、ウラジオストクで私が経験した仕事等を通じて、ウラジオストクの事情を紹介したいと思います。読了後、少しでもウラジオストクに興味を持っていただければ幸いです。

2 ウラジオストクの概要

(1) ウラジオストクの人口など

ウラジオストクは、人口約60万人で、極東のサンフランシスコとも称される風光明媚な街です。中国とは陸続きで、韓国との間を結ぶ航空路線も多かったので中国・韓国人の観光客やビジネスマンが多く、またウズベキスタン、キルギスなどかつてのCIS諸国からの出稼ぎ労働者も多いこともあり、実際の統計上の人口よりも活気がある街のように感じられました。

(2) ロシアにおけるウラジオストクの重要性

プーチン大統領は、国家発展のため最も重要なのは、ロシア極東地域の開発だと指摘し、2012年にウラジオストクで開催されたAPEC時には、その会場となるルースキー島の極東連邦大学の建設を含む大規模な集



APEC時に完成した金閣湾橋

中開発^(注2)が行われました。以降もウラジオストク自由港などの経済特区が創設され、投資誘致政策及び極東開発は現在も進行中です。ウラジオストクは日本海に面した港を保有し、シベリア鉄道の始発着点でもあり、ロシア極東の物流拠点として、また、ユーラシアと太平洋を結ぶゲートウェイとなる国際都市としての更なる発展が期待されています。

(3) 親日家の多いウラジオストク

ソ連崩壊後の1990年代、国内の混乱で経済が低迷する中、ウラジオストクは日本海側の新潟港や富山港などから日本の中古車を輸入し、中古車販売ビジネスなどの経済活動が盛んに行われていた歴史があります。中古でも品質の良い日本車は市民の圧倒的な支持を受け、今でも市内の9割以上を日本車が走っています。このような背景からウラジオストクは日本ブランドに対する信頼が厚く、ロシアの中でも特に親日家が多いという特徴があります。

(4) 日本人観光客

ヨーロッパの歴史的建物が数多く残る街並みは、日本から2時間ほどのフライトで行くことが可能であり、「最も近いヨーロッパ」を楽しめるとして、コロナの影響を受ける直前までは、日本人観光客が急増していました。2017年に始まった渡航ビザの手続きの簡素化（極東地域における電子ビザ制度の導入等）も影響し、2019年、ウラジオストクのある沿海地方を訪れた日本人は約35,000人で4年前の約5倍に急増してい

ました。また、2020年の春には、JALとANAがそれぞれウラジオストクと成田間の直行便をほぼ同時期に就航させ、日本の航空会社の就航により、ウラジオストクを中心にヒト・モノの交流が飛躍的に増加することが期待されていました。そのような矢先、今般の世界的なコロナの感染拡大の影響を受け、残念ながら日本の航空会社による運航は休止を余儀なくされることになりましたが、本誌が発行するころには、状況が改善に向かい、以前のような活気のある街にできるだけ早く戻って欲しいと切に願っています。

3 総領事館における業務内容

(1) 業務全般

私が勤務した在ウラジオストク日本国総領事館は、外務省の組織です。日本人の館員は、15名ほどで、そのうち半数が外務省の出身でそれ以外の館員は各省庁からのアタッシュエや地方自治体からの出向者で構成されていました。私は経済班に所属し、主に国土交通省のロシア案件を担当していました。具体的には日露協力による都市環境整備、JAL・ANAの新規就航支援のほか、観光庁のインバウンド施策として、日露の交流人口の拡大などを担当していました。その他にロシア人の政府関係者やビジネスマン、日本企業の駐在員等から情報を収集したり、ロシア語で書かれた現地の新聞記事を翻訳したりして、ロシア極東地域の経済分野に関する情報を整理しながら、日露協役に役立ちそうな情報を日々集めていました。



JALの就航記念レセプション



日本のゴミ処理事情についてロシア地元テレビ局の取材に英語で応じる筆者

(2) 東方経済フォーラム

在任中で一番の大型行事は、毎年9月に開催される東方経済フォーラムで合計3回経験しました。私は日露両首脳などが参加する公式行事等において、日本側の報道機関がロシア側のそれと公平に取材できるようにプレスの取材協力を担当しました。事前にロシア大統領府の政府関係者と両首脳の動線等を確認して、報道関係者の立ち位置などを調整し、当日は日露両国の取材に不公平が生じないように、官邸の公式カメラマンや日本側の報道関係者をスムーズに誘導するなどの役目を担当していました。通常なら近づいただけで、ボディガードにつまみ出されそうですが、取材協力を担当していたおかげで、プーチン大統領を目の前で見ることができました。

4 ウラジオストクにおける日露協力による「都市づくり」

(1) ウラジオストクのマスタープラン

ウラジオストクの「都市づくり」に日本企業が深く関わっていました。(株)日建設計がウラジオストクのマスタープランを策定し、プランの具体化が進められていました。そのプランのコンセプトは、市内中心部に集まる都市機能を分散させることで、渋滞問題を解消し、港や歴史的建物などの観光資源を活かしながら、優秀な教育機関を卒業した人材がウラジオストクで活

躍できるようなまちづくりを目指すというものです。マスタープランの他にも日本式住宅建設、魚市場建設、廃棄物処理分野での協力、立体駐車場建設、交通渋滞緩和のためのスマート信号設置など様々なプロジェクトにおいて日露協力の検討が進められていました。

(2) 日露協力の日本側の主役は日本企業

日露協力の下、各種プロジェクトを検討していくためには、日本企業が当該案件に関心を示していることが大前提となっていました。ロシア側からウラジオストクが抱える様々な現状課題（例えばゴミ問題や交通渋滞など）を挙げてもらい、その解決に向けた技術・ノウハウを持つ日本企業がビジネスとして関心を持つことが、日露協力の進展の鍵となります。そこでいつも課題となるのは「ファイナンス」をどうするかでした。当初、ロシア側は日本政府によるファイナンスの支援をしてもらえるものとの誤解がありましたが、ロシアはODA対象国ではないので、日本政府が資金援助をすることはありません。ロシア政府が公共事業などとして、ファイナンスを支援するか、あるいは民間企業が純粋にビジネスとして案件を進めるしかありませんでした。ビジネスとして進める場合でも、ロシアの法制度の下、日本企業単独で案件を進めるは難しいので、日本企業はロシアの法律を理解するロシア側のパートナー企業等と手を組む必要がありました。時には、日露ビジネスマッチング等の橋渡しの役目も私は担当していました。

(3) ロシア側の役割

ビジネスとしてファイナンスの一部でも日本企業が負担する場合、日本企業が利益を見込めるプロジェクトなのか判断するために、ロシア側からの適切な情報提供が必要になります。立体駐車場建設プロジェクトを例に挙げると、利用者のニーズについて市場調査はされているか、駐車料金をいくりに設定するか、投資回収計画などのF/S*1が日本企業に理解できる言語(日本語、少なくとも英語)によって準備されている必要があります。日本企業が納得するようなF/Sが十分に



この街ではゴミの分別が始まったばかり。ウラジオストクのゴミのリサイクル活動を仕掛けた代表(右女性)らと

検討され、またファイナンスの問題が解決されないことには、日露協力案件としてプロジェクトを前に進めることができません。私は月に1回程度開催されるロシア側の「都市づくり」の検討会議に日本側から代表として参加していました。そこでは、ロシア側の役割を正しく理解してもらい、適切な情報を提供してもらうように働きかける等の役割も担当していました。

5 各国のビジネスの違い

ロシア企業の代表らと意見交換する機会も多くなりました。他国の企業をパートナーとしてビジネス契約する場合、中国企業は即決で、韓国企業もそれほど時間がかからないが、日本企業は、契約に数カ月以上かかる。そのためスピード勝負のビジネスの世界で他の企業に先を越されてしまうなどの不満をよく聞かされました。

一方で、一旦契約してしまえば、中国・韓国企業よりもビジネスが永く続くのは、日本企業であると日本流を評価する意見も聞きました。グローバルな展開を目指す企業にとって、今後どの国のやり方がスタンダードになっていくか私にも分かりませんが、日本企業の立場からすれば、情報が少なくあまり馴染みがないロシア企業（その多くはソ連崩壊後に民営化、あるいは新しくできた企業）とは、時間をかけてしっかりと検討した上で契約を交わしたいという思いがあると思います。

*1 F/S フィジビリティスタディ (feasibility study)

プロジェクトの実現可能性を事前に調査・検討すること。実行可能性調査、企業化調査、投資調査、採算性調査とも呼ばれ、「F/S」と略記される。

6 世界銀行のビジネス環境ランキング

ロシア企業から見ても複雑といわれるロシアの法制度（言語もロシア語で日本側には理解の障壁となる）の下で、日本企業には参入のハードルが高いと思われるロシアビジネスですが、興味深いデータがあります。毎年世界銀行が「ビジネスのしやすさ」を順位づけで公表するランキング(Doing Business)です。2018データでは、日本（34位）がロシア（35位）より上位でしたが、2019データでは、日本（39位）がロシア（31位）に順位を逆転されるという衝撃の結果になります。2020データは、日本（29位）が差を詰めるもロシア（28位）の方が依然上位をキープする結果となっています。この結果から、信頼のおけるロシア企業のパートナーさえ見つければ、実は日本企業にとって、ロシアはビジネスしやすい環境なのかもしれません。

7 ウラジオストクのおすすめ

これまで専門的な話題で紙面の大半を使い切ってしまいましたが、3年間過ごした経験から最後に旅行先としてのおすすめを3つ紹介するので、コロナが収束したら、ぜひ一度ウラジオストクを訪れて見てください。

(1) テラスでカニを食べながら贅沢なひととき

ウラジオストク市内では日本よりもリーズナブルにタラバガニを提供するレストランが多くあります。ウラジオストクの夏の夜は9時ごろまで明るいので、夏の夜にテラス席で、ビール片手にタラバガニを一匹まるごと食べて、贅沢な気分を味わうことを目的に旅行するのもおすすめです。

(2) お洒落をしてバレエを鑑賞

2016年1月にはマリンスキー劇場がオープンし、本場のバレエやオペラが手頃な価格で鑑賞できます。ロシア人の女性は、みんなヒールを履いて、ドレスをお洒落に着こなして観に行くので、女性はヒールとドレス、男性はフォーマルなジャケットをスーツケースに入れて行くことをおすすめします。



人気レストランで提供されるカニ

(3) シベリア鉄道寝台列車の旅

ウラジオストク駅午後9時発の夜行寝台列車「オケアン号」に乗ると、同じ極東の都市ハバロフスクに午前8時半につきます。私は5人家族で旅行しましたが、2等車（4人部屋）を予約したので、私1人だけ家族とは離れ、別の2等車（4人部屋）で寝ることになりました。途中駅で、私と同部屋を予約したと思われる見知らぬロシア人（ムキムキの男性）が入ってきて襲われなにかドキドキしましたが、朝になると身支度の整理に手を貸してくれて、見た目とは裏腹に優しい記憶があります。ロシア人の優しさに触れるために、敢えて2等車（4人部屋）の利用にチャレンジすることをおすすめします（笑）。

注1

2016年5月、ロシア南部のソチで開催された日露首脳会談において、安倍総理からプーチン大統領に対して、日露経済交流の促進に向け、8つの項目からなる協力プランを提示。協力の分野は、（1）健康寿命の伸長、（2）快適・清潔で住みやすく、活動しやすい都市作り、（3）中小企業交流・協力の抜本的拡大、（4）エネルギー、（5）ロシアの産業多様化・生産性向上、（6）極東の産業振興・輸出基地化、（7）先端技術協力、（8）人的交流の抜本的拡大からなり、国土交通省は、8項目のうち（2）と（6）を主に担当している。

注2

APEC時の集中開発としては、ほかにもルースキー島連絡橋、金閣湾橋の2つの大きな橋が架橋され、ウラジオストクから車で気軽にルースキー島へ渡ることができるようになった。